恋人代行

植田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋人代行

【Ｎコード】
Ｎ９１１０Ｙ

【作者名】
植田

【あらすじ】
「恋人のフリをしてもらいたい」。ある事がきっかけで社長から恋人代行を頼まれた倖。社長はまとわりつく女性たちを排除したかった。社長はフリを頼んだ相手が、本気の恋に発展しなさそうな相手を探していた。倖はゲームにしか興味がないためうってつけだった。そんな事を言っておきながら、社長のほうが次第に倖に惹かれていき…。

第一話　きっかけ

「よし、終わった」

仕事を終えた倖（さち）は立ち上がり、鞄を手に持った。

「ゲームの続きが出来る」

腕時計を見ると二十時を過ぎたあたりだった。帰宅まで歩いて十五分、シャワーを浴びて簡単な夕飯で済ませたとしても二十一時前にはゲームを始められる。くふふとにやけながら、エレベーターに乗り込む。

倖は通勤時間が惜しくて、会社近くの安いアパートで暮らしていた。

峯島倖（みねしまさち）三十二歳。ゲームに夢中になり過ぎて恋をする間もなく、気が付けばこの年に。結婚願望のない倖はゲームさえあれば満足だった。いつかは大音量、大画面のテレビでゲームをする事を夢見て、マイホーム資金をせっせと貯金していた。

目標額まで貯金はまだまだ足りないが、ゲームの為に仕事を頑張っていた。

エレベーターが一階へ到着し、扉が開く。早く開いてほしくてうずうずしていた。すり抜けられる程度の隙間ができると、倖は飛び出した。

早歩きで帰れば、十五分はかからない。倖は少しずつ駆け足になっていく。

照明が必要最低限にまで落とされたロビーで、男の後を女が追う姿が見えた。女が男の腕を掴むと、男はその腕を払いのけ、口論が始まる。

――痴話喧嘩か。

関心のない倖は彼らを無視してロビーを駆け抜ける。が、突然顔面に衝撃を受けた。

「遅かったじゃないか」

「ほえ」

顔に当たったのは、痴話喧嘩真っ最中の男の体だった。男は倖の肩に手をのせ、耳元で囁いた。

「すまないが、話を合わせてくれ」

「何よ、その女！」

上品なスーツを身に纏い、妖艶なスタイルを持ち合わせた美女がヒステリックに騒ぎ出す。

「俺の恋人だ」

「嘘でしょ？　あなた恋人はいないって言ったじゃない」

――えぇえ！？

突如修羅場に放り込まれた倖は動揺した。

これを切り抜ける方法が二択しか思い浮かばなかった。

？無視して立ち去る。

？男に協力する。

頭の中がゲーム感覚に陥った。

ゲームだったら絶対に?を選ぶ。その後のイベントが見たくなるから。
けれど面倒なことに巻き込まれるのもちょっとな……。
倖は目を瞑り、考えた。
男は困った様子で倖を見ていた。
その表情を見てしまうと、?を選ぶと後味が悪そうだった。
選択肢が決まると、倖は男の頬に顔を寄せた。
「ごめんなさい。思ったより時間が掛かって掛かってしまって」
男の肩に手を当てて、彼の頬にキスをするふりをした。女に顔を見られたくなかったので胸に顔を埋めた。
こんな感じでいいのかな?
倖は男の顔をちらりと覗き込む。男は安心した表情を見せ、倖の肩に手をまわす。
「失礼しちゃう!」
その女は頭に血を上らせ、ロビーから消えていった。その姿が見えなくなると男は胸をなでおろし、倖から離れた。
「すまない、助かった。君、名前は?」
――よし、完了。
倖は名乗らず鞄を肩に掛け直して、足早に立ち去った。
「あっ、君!」

「今日はＲＰＧはやめて、恋愛ゲームにしよっと」
とにかく倖は早く帰宅してゲームがしたかった。

☆　☆　☆

「峯島君、ちょっと」
翌日、倖は加藤課長から呼び出された。けれどいつもと様子が違い、通路の方から手招きしている。そして誰も使用していない会議室に通された。
中年太りの加藤課長はハンカチで額の汗を拭っていた。倖は課長の仕草を目で追っていた。

「君は社長と面識があるそうだね」
「……へ？　ありませんけど」
「おかしいな。さっき社長からうちの部署に『メガネを掛けて、一つに髪を束ねた女性が働いているだろう』って電話が来たから君だと思ってしまったよ」
「……私しかいないじゃないですか、その格好」
「だろ？　そんな君に、仕事を依頼したいそうだよ」
「仕事、ですか？」
課長は頬に手を当て、倖の耳元で声が漏れないように囁いた。
「社長がもう一度恋人のフリを頼みたい、と」
その言葉で、もやもやしたものがすっきりしてしまった。

昨日の男は社長だったのか！

「お断りします」

踵を返して会議室から立ち去ろうとした瞬間、課長に肩をがっしと掴まれた。

「だめだっ。この話を聞いてしまった以上、君に断る権利は無いんだよ！」

「ど、どういう事ですか？」

「これは極秘なんだ。この件が実行できなかった場合、それに関わった人間はクビになる」

倖は課長の顔をまじまじと見つめた。どうやら課長にふざけている様子はなかった。

「嘘ですよね？　それにこういった内容でしたら、私ではなくても他に適した女性がいますよね」

倖はファッションに無頓着だった。黒髪を一つに結わき、化粧っ気もなければ、安価な眼鏡を掛けていた。

「それが、口の堅さも条件らしくてな……。こんな内容だとは知らず、『彼女はどんな性格だ？』と聞かれたもので、うっかり君の事を先に話してしまったんだよ」

倖の、口の堅さはお墨付きだった。そもそも人の噂話には興味がないからである。但しゲーム関連の情報に関しての口は軽い。

「事情は分からないが、峯島は一度手伝っているんだろう？　社長

が、出来れば他の人には知られたくないと言っている。俺だって困ってるんだ。峯島～、どうか助けてくれ！　クビになったらカミさんにどやされるだけでは済まされないんだよお」

頼むう～、と肩を揺すられて課長は懇願した。

課長は四十代後半。お子さんは確か、上から高校生・中学生、下はまだ幼稚園児だと聞いたことがある。課長は必死に倖を引きとめるが、倖には何のメリットもなかった。

「うさん臭すぎます。私は断固お断りします。それでは！」

真顔で敬礼し、課長めがけて手をこめかみから離してその場を後にした。

課長の「みねしまぁああ」と悲痛の叫びを背中にうけながら。

第二話　呼び出し

通常業務に戻り、テンキーで数字を入力していると内線が掛かってきた。

「はい、経理課です」

受話器を肩にはさみ、右手でペンを持とうとした時だった。

「お前は誰だ」

低く、冷たい声で男は言った。倖は開口一番のこの言葉に苛立った。内線でいきなりこんな事を言う人間が社内にいたとは。言葉の語尾に力が入る。

「失礼ですがどちら様でしょうか？」

「谷川だ。お前の名前は？」

「峯島です」

知らない名前だなと思いつつも、名乗ってくれたのでこちらも返事をした。

「……貴様、『断った』な」

はっとした。

首だけを動かし、課長の席に視線を送る。

左手に受話器、右手にハンカチを握りしめたまま、ぐったりとデスクに横たわっていた。まるで戦いに敗れた戦士の様に。

それを見て血の気が引いた。

――ま、まさか。

「今すぐ社長室に来い」

豪快に電話を叩き切る音がした。耳が痛かった。

無視しよう、そう思ったけれど課長の姿を見てしまうと、課長にも更に迷惑が掛かる気がした。

こういう時は直接会って断るべきである。

意を決して立ち上がり、フロアを出た所で倖は立ち止った。

――む、社長室になんて行った事が無い。

フロアに戻り、大股でターゲット先へ向かった。

「課長」

「み、峯島」

課長の体がびくんと跳ねた。たらりと額から流れる汗をハンカチで拭う。

人に話を聞かれると厄介なので、机の両端に手を置き、課長にずいっと近寄った。

課長はハンカチを握りしめ、身構えた。

「社長室はどこですか？」

社長室は最上階だった。
言われたとおりに足を運び、社長室の前に辿り着く。
扉をノックし、声をかけると室内から上品な声で応答があり、扉が開かれる。

「経理部の峯島です。社長にお会いしたいのですが」
「伺っております。どうぞ、お入りください」

扉を開けてくれた女性はとても艶やかで、綺麗な人だった。
他にも目の保養になりそうな美女が数名いた。秘書というものは有能かつ顔で選ばれるのだろうか、などと考えた矢先、倖は自分の服装がなんだか恥ずかしくなった。
秘書室を抜けると奥に社長室の扉が見えた。秘書が優雅な動きでその扉を押し開ける。

「どうぞ」

倖は秘書に会釈をして、社長室に足を踏み入れた。

「失礼します」

倖が部屋に入ると、中にいた秘書は全員席を外した。

「お前が峯島か」

低い声が窓際から聞こえてきた。その瞬間部屋の空気が張り詰めた。声だけで威圧感が凄かった。
昨夜の必死な声とは大違いだった。

課長から、社長の簡単なプロフィールを聞いてきた。社長の名前は谷川友樹(ともき)三十七歳。エリート大学卒業後、海外の企業で経営学を学んだ後に、親の経営しているこの会社へ入社。数年で社長に就任。元社長は会長に就任した。

倖は聞いたことはあったが、興味がなかったので記憶から抹消していた。そもそも経営者に関心がなかった。それを課長に言ったら怒られた。

社長はぎしりと黒い革製の椅子を鳴らして立ち上がり、倖を見た。上から下までじっくりと。

「昨日は助かった。礼を言う」

「いいえ、お礼は結構です。……よく、私だと分かりましたね」

「退社時間から絞り出した」

倖は俯いてぽつりと呟いた。

「職権乱用」

「なんだと?」

「いえ何でもありません」

地獄耳め。

倖は社長を改めて観察する。社長は背が高く、体はがっしりしていた。年齢の割に貫録があった。端正な顔立ちで、はたから見れば格好いい部類だろう。だが倖の好みではなかった。

「呼び出したのは他でもない。恋人のフリを頼みたい」

ほらきた。
倖はさっそく戦闘態勢に入った。

第三話　お断りします

「呼び出したのは他でもない。恋人のフリを頼みたい」
「そのお話はお断りしたはずですが」
社長は視線だけで、倖を押し黙らせた。
「峯島、お前は独身だと聞いたが今、彼氏はいるのか？」
――いきなりスルーですか。
「いませ……、います！」
危うく正直に言ってしまう所だった。彼氏がいる事にするのが、断るには一番早い方法だった。
「そうか、いないのか。加藤課長の情報通りだな」
――課長、私の情報をどこまで流してるのよ……。
がっくりと項垂れた。
「どうして恋人のフリが必要なんですか？」
「俺は正直結婚に興味が無い。何度もそういっているのに近寄ってくる女性が後を絶たない。女に困っているわけではないし、恋人も今は要らないと思っている」
確かに女には困ってはいなさそうだなと倖も思った。
「なるほど。けれど恋人を演じるのなら、秘書の方でも十分なので

はないでしょうか？」
「なんだと？」
不機嫌な感情をすごく表に出してくる男だった。
「あんなに綺麗な女性が身近にいらっしゃるなら、あの方々でも十分役割を果たしてくれるのではないかと思いまして……」
社長は深い溜め息を吐いた。
「他の奴らに頼まないのは、そのまま本気になられても困るからだ。秘書のやつらなんて、玉の輿を狙って香水をぷんぷんさせてるんだぞ？　あわよくばと考えている奴らにこんなこと頼めるか」
「もしも私が協力して、本気になったらどうするんですか」
倖の言葉に、社長は鼻で笑った。
「お前は、ゲームにしか興味がないと聞いている」
――おっしゃる通りでございます。
倖は脱力した。
そんな情報まで流しているのか、課長は……。
顔を覆わずにはいられなかった。
「それと経営の事を他人に口外しない、秘密を守れるやつでないと困るんだ」
「……ああ、それで口の堅い人を探していたんですね。ではプロの方でも頼んで下さい。では！」
倖には『断る』という選択肢以外は考えられなかった。退出する

ために扉に体を向けた。
社長の足は長かった。あっさり捕まり、体を反転させられた。
「何ですか」
「お前は分かっていないようだから教えてやろう。これを見ろ」
ばっと目の前にＡ４の紙を広げて見せる。
それには契約書と書かれていた。つらつらと書かれた文章を、瞳だけを動かして読んでいく。
どこにも、断ったらクビとは書かれていなかった。倖はほっとした。
けれど最後のほうに『完璧に演じることが出来た場合、報酬有。金一封・二百万円也。受け渡し方法…一時金として給与に上乗せ』と書かれていた。
「ほっ、報酬！？」
「これはビジネスだ。悪くない話だろう？　さっさとこの書類にサインをしろ」
お金に目が眩んだ。なんて中途半端な金額なんだと思いつつも心が揺れる。マイホームを手に入れるためにはまだまだお金が必要だった。
ポケットから電卓を取り出し、ガチャガチャ鳴らしながら数字をはじき出す。
「はあー……」
倖は首を横に振った。一時金で受け取ると税金が引かれる事に気が付いてしまった。そして恋人のフリを完璧にこなす事自体に無理

がある。恋愛なんて学生の頃にしたきりだ。

「この話は無かったことにして下さい」

「この額じゃ不満だというのか！？」

両腕を掴み、社長は諦めない。倖は逃れるために必死にもがいた。

「違います！　一瞬目が眩みましたけど、私には無理です。美しい、つりあう人を探して下さ……痛っ」

顔に社長の肘があたり、倖の大事な眼鏡が飛んだ。お金を切り詰めて買った安物の眼鏡が。厚みのあるレンズの表面は傷が付きやすかった。

「眼鏡が……」

メガネメガメと絨毯に手を這わせる。あった。

持ち上げると特段傷も無ければ壊れてもいなさそうだった。ふかふかした絨毯のお蔭だった。立ち上がりながら眼鏡を掛けようとしたところに、社長に眼鏡を奪われた。

「ちょっと、何するんですか」

社長が驚いた様子で倖を見ていた。

「？」

「驚いたな」

髪の毛のゴムをぴんと取られ、毛を手で梳かすように頭を撫でられた。

ぞわぞわっとした。

「お前これを見て何とも思わないのか？」

鏡の前に立たされ、倖は目を細めた。

「近眼なので良く見えません」

よくみろ！　と顔面を掴まれ、鏡の真ん前に押し出された。

「これが何か？」

普段から見慣れている自分の顔を見ても倖は何とも思わなかった。

はあ～、と社長は溜息を漏らす。

「お前に頼みたい。口の堅さも加藤課長のお墨付きだしな」

「いーやーでーす！　面倒な事に巻き込まれるのは嫌なんです」

「逃げる気か、峯島！」

眼鏡を取り返し、社長室を出て扉を閉めた。

ふう、と息を漏らす。

ふと視線を感じた。秘書の面々が倖を見ていた。

――そうか、このだらしない格好のせいか。

眼鏡を掛け、身なりを整えてその場を後にした。

第四話　結局手伝う羽目になる

「頼み事をしたいなら、そちらから来て頼むのが筋じゃないでしょうか」

社長は諦めが悪かった。

あれからもしつこく内線で依頼され、倖は困った挙句に吐いた言葉だった。平社員が社長にそこまで言ったら、怒ってもう頼みに来ないだろうとたかをくくっていた。

――けど、来ちゃったよこの人……。

仕事を終わらせて下に降りると、社長はロビーで倖を待ち伏せしていた。その姿を見て倖は目を覆う。課長が倖の退社時間を報告したのだろう。

社長は人気（ひとけ）のない方へと倖を引っ張り、腰に手を当て、胸を張った。

「来てやったぞ」

「ごめんなさい。許して下さい」

倖は静かに頭を下げた。ちろりと社長の顔を見る。

「俺が直接来て頼んでいるんだ。約束だ。一度やってくれてるんだからいいじゃないか。一度や二度も同じだろう。頼む」

「勘弁してえ！」

手首をがっしりと掴まれ、振りほどくことができなかった。倖は腰を下げて必死に抵抗した。

「その後はもう近づかない。約束する。な？」
社長は倖の顔を覗き込んだ。諦めの悪さに倖はとうとう観念した。
「……じゃあ、一度だけですよ？」
「へえ」
その声の方向を見ると以前ここで出くわした女性が腕を組んで立っていた。呆れ顔で倖の体を眺めていた。
イライラが絶好調なのだろう。顎と指先がリズムを取っていた。
「彼の方が彼女にぞっこんなのね。そんなにいいわけ？　その女の体が」
「「えっ？」」
倖と社長は硬直した。
「あんた、見た目はダサいクセに体で横取りしたのね。見てなさいよ」
ふんと女性は力任せに地を蹴って消えていった。
「な、何か勘違いしてませんでしたか？」
「だな」
――だな、じゃないわよ。
倖は社長を睨みつけた。

「この際、フリなんかじゃなくて、きちんと相手の方に断ったらどうですか？」
「何べんもその気はないと言っている。見ていてわからなかったか？　あいつらは俺の話を聞こうとしない。だからこの作戦を思いついたんだ。あいつらと違うタイプの女性と付き合えば諦めてくれるだろうと思ってな」
「まあ、たしかにタイプは違いますよね」

倖は私服を見渡した。ラフなシャツにジーンズ姿だった。

「なるべく迷惑は掛けないように守ってやるから安心しろ。それとできれば髪の毛と眼鏡、何とかしておいてくれ。それと服装はオフィス系で頼む」

――あなたは●ーコですか。ピー●のファッションチェックですか？
心がぐっさりと傷つき、倖は貧血を起こしかけた。

☆　☆　☆

嫌々ながらも髪の毛は束ねず、家にあった使い捨てコンタクトを付ける。
倖は自覚はしていたが、同性からはっきりと『ダサい』と言われ、少なからずショックではあった。更に社長からの駄目出しで傷口に塩を塗られた気分だった。
ラフな格好はやめて、スーツを着崩した感じで出社した。こっち系はてんで弱かった。

社内ではイメチェンですか？と聞かれまくったので気分転換だとごまかした。

倖は内線が鳴る度にワンコールで出る勇気が無くなっていた。電話から視線を外しつつも三回目で渋々取る。

「倖か？　今すぐ来い」

案の定、社長からだった。

――いきなり呼び捨てで呼び出しですか……。

机に手を掛けて、重たい腰を上げた。

昨日の今日だから契約でもさせられるのだろうかと、とぼとぼと社長室に向かった。秘書に通してもらって部屋の扉を開けてもらうと、高齢の男女が立っていた。二人は倖をまじまじと見ていた。恐る恐る部屋に入る。男性は明らかに会長だった。社内報やパンフレットでよく見かける顔だった。

「失礼しま……す」

「倖、おいで」

社長が弾ける笑顔を見せ、手を伸ばしてきた。ぞくりとした。この男も笑うのかと驚きつつも状況が全くつかめない。

どうしていいのか分からず、とりあえず社長の傍に寄ると腕を引っ張られた。

「紹介するよ、こちらが交際相手の峯島倖さん。こっちは俺の両親だ」

――ええ！？　いきなりフリ開始ですか！？

うっかり条件反射で対応する。

「初めまして、峯島倖と申します。よろしくお願いします」

腕を振りほどいて会釈した。が、すぐに手を取られ、握られる。その手は社長の背中に引き寄せられたので、肩がこつんと社長に触れた。握られ慣れてないから手がむずむずした。

「本当に付き合ってるのか？」

突然社長の指が手のひらをくすぐり、倖の指を優しく絡め取る。ぞくっとして、倖は思わず顔が熱くなり俯いてしまった。

「その反応からして、本当のようね。疑って悪かったわ」

「だからそう言ってるだろ」

両親は渋々納得した様子だった。

「わかった。あちらの令嬢にはこちらから断りの連絡を入れておくから」

「そうしてくれると助かる」

社長の両親が部屋を出る間際に、社長が倖の耳元に息を吹きかけた。倖はぞわっとして軽く悲鳴を上げた。

倖は小声で「止めてってば」と社長を肩で小突いた。

その声を聞いた両親は、見ていられないといった様子で肩をすくめ、立ち去った。

扉が閉じられたと同時に、社長は手を離した。ふっと笑って机に体重を掛ける。倖は耳を手で覆った。

「上々だな」
「いきなりフリで呼び出すなんて……」
社長はストーカー女だけでなく、両親から持ち込まれる見合い話も一掃させるために倖を利用しようとしていた。
「もちろんそれなりの報酬は渡すと言っただろ。周りが落ち着いたら、別れたと伝えるから安心しろ」
社長が倖に近づき、真顔で鼻先に指を当てた。
「だがなフリといっても、全力で演じろ？　これはビジネスだ。絶対に嘘だと悟られるな。分かったな」
「はぁい」
背中を仰け反らせて倖は返事をした。社長は頬を掴んだ。
「なんだその嫌そうな顔は」
「いへ。べちゅに」
「報酬で好きなだけゲームでも買え」
その言葉を聞いた倖が、間を置いた後、徐々ににやけだす。
「お前、本当にゲームが好きなんだな。報告書通りだな。頑張りようによっては、グッズとか手に入れて来てやろうか？」
「えっ」
倖は目を輝かせた。

「分かり易いなお前。知り合いがいるからツテでもらってきてやる。早速だが契約書にサインしろ」

書面で逃げられない様にする手段はさすがだなと倖は感心した。倖はソファーに腰掛けて、契約書にサインをした。

「そういえば課長は私の事、どういう風に報告を上げてるのでしょうか」

社長は机に向き直り、書類を見直す。

「峯島倖三十二歳。一人暮らし。彼氏無し。彼氏がいたかどうか不明。それくらい付き合い無し。趣味はゲーム。ゲームに関しての会話は熱い。ゲームソフト発売日に残業を頼むのは難しい。恋愛に興味が無い。着飾る金があるならゲームを買う。干物女。欲しいものはお金。そのお金の使い道はゲームを大音量で楽しむ為のマイホーム資金。ローンは組まずに一括購入希望。現在マンションか一戸建てのどちらにするか迷っている様子」

「はっ……」

課長の洞察力に驚愕した。言葉が何も出なかった。

「まずは少し自分磨きをしろ。職場でもその格好でいろよ。今日みたいにいつ呼び出すか分からないからな」

倖の不得意分野だった。というより、マイホームの為の貯金に手を出したくなかったというのが本音でもあった。同じ使うならゲームを買った方がまだましだった。

「何黙ってるんだよ」

社長は空気を読み、財布から何かを取り出して倖の胸元にそれを押し付けた。

「金か？　だったらこれを使え。俺はもう行かないといけないから、じゃあな」

それを手で受け取るとそれはゴールドのクレジットカードだった。倖ははっとした。

「ま、待ってください社長！」

倖が腕を伸ばして引きとめるのを無視し、社長は鞄を掴んで颯爽と立ち去った。倖はその場に崩れ落ち、両手に納めたゴールドカードを見つめ、呟いた。

「待ってって言ったのに。クレジットカード、名義人しか使えないんですけど……」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9110y/

恋人代行

2011年11月29日17時56分発行